

# 照葉樹林の生物文化多様性とその活用

京都大学霊長類研究所教授 京都大学ヒマラヤ研究ユニット長 湯本 貴和

## 1. 照葉樹林文化論

1960年代のおわりに上山春平、中尾佐助、佐々木高明らによって提唱された照葉樹林文化論は、日本の基層文化をなす要素の多くが中国雲南省からネパール・ブータンにいたる東亜半月弧に起源を求めることができ、照葉樹林帯とよばれる常緑広葉樹林という共通の自然環境が基層にあるとした（上山編 1969、佐々木 2007など）。照葉樹林文化を特徴づけるのは、根菜類の水さらし利用、陸稻栽培、モチ食、麴酒や納豆などの発酵食品、鶉飼、漆器、絹、茶などの生業や食文化に加えて、歌垣や入れ墨などの民俗である。いくつかの批判があるけれども、これは現在から見れば、生物文化多様性の先駆けになる考え方ではなかっただろうか。

いうまでもないが、照葉樹林帯は人間活動がないと仮定した潜在植生図上の概念であり、それを裏付ける暖かさの指数などで定義されるものである。日本でいえば、東北日本はブナなどで構成される夏緑樹林で、西南日本は照葉樹林である。照葉樹林の別名は暖温帯性常緑広葉樹林で、カシやシイの仲間、あるいはクスノキの仲間が多い森林だ。この照葉樹林帯は、西南日本から台湾を経て、はるか大陸の中国南部やヒマラヤ山麓にまでつながっている。いっぽうで東北日本を代表する夏緑樹林は冷温帯性落葉広葉樹林ともよばれ、ここにはブナ帯文化ともいえる別系統の基層文化がある（市川 1984）。このブナ帯文化は、堅果や山菜・キノコ利用、哺乳類の狩猟などで特徴づけることができ、ナラ帯も含めた朝鮮半島やロシア沿海州という地理的な広がりをもつ。

ちなみに暖温帯林の南側に位置するのは、亜熱帯林である。ただ、照葉樹林という暖温帯の常緑広葉樹林と、亜熱帯の常緑広葉樹林は、相観上ではなかなか区別することができない。どちらも主にシイとカシの林の中にクスノキの仲間などが混じる多様性の高い森林であり、亜熱帯林では熱帯に典型的なアコウやガジュマルなどの植物がより多く混入する程度で、亜熱帯林を暖温帯林とはっきり区別して説明するのは困難である。

このアジアの照葉樹林帯では、照葉樹林の生物文化多様性、つまり自然の恵みを活かした生活と文化が育まれてきた。昔からの長い歴史の中で風土に根ざしながらお互いに交流しあい、高度な伝統的な知恵が継承されてきたわけである。ここ 100 ～ 200 年にわたるグローバリズムの段階的な拡大の中で科学技術が世界中を席捲し、特に過去数十年間で交通・情報・金融が大きく変化した。地域に根ざした文化が急速に失われるのと生物多様性の喪失は、ほぼ同時並行的に進行しているといつてよい。この流れにどのように対抗していくのが、直面している非常に大きな課題である。

## 2. 自然の恵みを活かした生活と文化

照葉樹林文化論で取りあげられたいくつかの要素について見てみよう。中国の雲南省には標高 2500m 前後だが、日本の宮崎県・綾や鹿児島県・屋久島の照葉樹林とよく似た林があり、マテバシイやカシといった常緑のどんぐりの仲間が森を構成している。雲南省でも春はワラビが採れ、市場ではこんにゃくが売られている。コンニャクイモからこんにゃくを作るのは特殊な技術が必要なので、それを支える文化がコンニャクイモとともに日本に渡来したと考えるのが普通であろう。

雲南省には麻から糸を組んだり、天蚕から絹糸を取ったりする上、藍染も存在する。竹で容器や家具を作るのも照葉樹林文化に多くみられるが、もっと南の熱帯林にも共通する文化である。漆器でいえば、福井県で縄文早期の遺跡から出土したツバキの材で作った櫛に漆を塗ってあるのが、日本で最も古い漆器の遺物である。轆轤を使った挽き物の技術も、照葉樹林帯に共通である。「広葉樹はすぐ狂うので、長い時間かけて乾燥させてようやく挽くことができる」ことは、各地の挽き物職人の共通認識である。

植物利用だけではない。イノシシ食が純粹に照葉樹林文化といえるかは疑問であるが、九州でも本州でも、あるいは奄美大島や西表島でも、シシ肉は照葉樹林帯の冬の代表的な食材である。伝統文化が残っていることで有名な宮崎県椎葉村では、イノシシ猟に関する儀礼が多く知られている。イノシシを捕ったら内臓をいくつかに切り、それを串刺しにして山の神に供える。また猟師のお宅の鴨居にはイノシシの下顎骨が掛かっていて「かまげた」とよぶ。岡山県の弥生時代の遺跡からも、イノシシの下顎骨を束ねたものが出土している。戦果品を記念として置いておくというよりは、獲物の靈力を信じたものかもしれない。台湾最南の少数民族パイワン族では、貴族社会と平民社会がはっきり区別されている。貴族の服にはイノシシやシカをデザインした文様がある。頭目の印はカムリワシの尾羽根で、ウンピョウの毛皮も衣装にする。猟師は貴族に仕える立場であるが、猟師集団の小屋には椎葉と同じように捕ったイノシシの下顎骨を飾る（写真1）。



写真1 台湾のパイワン族の猟師小屋には、イノシシの下顎骨などが飾られていた

蜂蜜も照葉樹林限定とはいえないが、日本各地にはニホンミツバチを使ったさまざまな養蜂術がある。木をくりぬいて巣箱を作るタイプや、もともと空洞のある木を使うタイプなどである。空洞を使った養蜂術は非常に古くからあって、九州では「ウト」（写真2）、対馬では「ハチドウ」、紀



写真2 宮崎県椎葉村のウト。ニホンミツバチの巣箱になっている

州では「ゴウラ」とよぶ。屋久島でニホンミツバチを飼っている方に伺うと「蜂は“のさる”ものである」とのこと。“のさる”という表現は、「福がのさる」ように、自分で求めて達成できるわけではなく、向こうからやってくるニュアンスが強い。蜂がのさる人は一種の人徳者で、徳のない人には蜂はのさらないのだという話をよく聞く。ニホンミツバチは非常に警戒心が強く、巣箱に入ってもすぐいなくなってしまう。きちんと調べれば物理的・化学的な原因があるのだろうが、昔から人々は自分の徳や運に結びつけて考える傾向があった。蜂がのさったり、のさらなかったりするという表現には、自然への敬虔な気持ちが感じられる。

### 3. 照葉樹林帯と夏緑樹林帯

旧石器時代、今から2万5000年前は最終氷期最盛期で、今の植生帯がひとつずつ南にずれていた。いま照葉樹林のある場所は夏緑樹林で、夏緑樹林があるところには北の針広混交林があった。温暖化するにしたがって、縄文時代までには現在の植生となった。

北海道を除いた日本列島の人口を見てみると、8100年前は約2万人、5400年前は約11万人、4300年前の縄文時代中期は26万人と推測されている（小山 1984）。この時代の人口は照葉樹林帯に少なく、夏緑樹林帯に多い。3300年前に16万人になると、九州はやや増えるが、近畿・中国・四国地方はずいぶん少なく、東北日本が圧倒的に多い。それが弥生時代になって、すなわち栽培植物が生活の中心となってから、照葉樹林帯と夏緑樹林帯の優位性が逆転する。

照葉樹林文化の特徴は、鵜飼や焼畑、漆器やお茶などの栽培・半栽培の動植物の利用である。栽培植物の中心は中国大陸で、その中にはイネも含まれていた。野生の山菜やどんぐり、キノコ、さらにはサケ・マス、クマ・カモシカに依存できるブナ帯文化にくらべて、照葉樹林では野生動植物だけに頼っていたのでは養える人間の数は少ないと推測される。照葉樹林文化は、野生の動植物をうまく使うというよりも、栽培あるいは半栽培の生物に依存する文化といえよう。

照葉樹林帯では明らかにキノコや山菜の利用が少ない。東北日本では春先

に山菜、秋にキノコを採りに行く人々の情熱には凄まじいものがあるが、西日本にはかつてのマツタケを除くとキノコ・山菜採りの文化に乏しい。これにはちゃんとした生物学的な根拠があると考えている。常緑樹は葉を1年以上長持ちさせる必要があるから、動物に食われないように化学的防衛、つまり毒をもつものが多い。安易な山菜利用は不可能である。落葉樹は葉の寿命が短く、それほど化学的に防衛されていない。薄くて軽いのが落葉樹の葉の特徴である。また照葉樹林帯では、根も有毒のものが多い。食べるには水さらしや発酵など、特殊な加工が必要だ。

キノコは樹木と同様に、高緯度地方に近づくほど種の数が少なく、赤道に近いほど種の数が増えていく傾向がある。キノコが特別に厄介なのは、同じ仲間（属）内でも、食べられるものと毒があるものがあることだ。植物の場合は食えるか毒があるかは、科や属という大きな区分で決まっている。ところがキノコは同じグループの中に、おいしいものと食べると死ぬかもしれないものが混じっている。これは一種のロシアン・ルーレットであり、食物としては最悪である。キノコには同定の決め手になるような外見上の特徴が乏しく、東北地方のキノコ採りのセミプロでも食用と有毒を間違えるほどだ。しかも毒キノコは時に致死的である。椎葉村のある地区ではキノコの中毒で集落が全滅してしまったことがあり、キノコ食自体が禁忌となっていると聞いた。属あたりのキノコの種数が少ない寒い地域では、食用キノコを毒キノコと間違える可能性が少ないので、大量に採集されて、大量に食べられる。それに比べて、毒か食か間違えやすい種類が多い照葉樹林のキノコ採りは低調なのではないか。これをキノコ誤食回避説と名付けておく。

1986年、まだ屋久島に住んでいた頃、地元の有志とともに民俗植物学的な調査をしたことがある。屋久島には標高差があるため、低標高では照葉樹林があり、その上にはヤクスギ帯という、スギやモミ・ツガが優占する中間温帯の森林がある。山頂部は風が強く、風衝性の低木林である。東北地方よりもキノコの種数は圧倒的に多いが、人々はシイタケとキクラゲ（ミミナバ・ミミンバ）しか食べないという調査結果であった。さらに食用、薬用など植物の利用を調査しても、集落や畑の周りにある植物を使っていて、原生林、つまり人が滅多に入らないところの植物は食用としては使われない。照葉樹林あるいはヤクスギ林の原生林で山菜を採ることはないのが、屋久島の自然

と人間の関係であった。

夏緑樹林では、まったく事情が異なる。東北から中部地方にかけて、近代以降、春クマ狩に特化した「マタギ」という狩猟者集団がある。世界遺産の白神山地で、マタギ文化を受け継がれている1940年生まれの方の山菜利用を調べたこともある。数多くの植物を山菜として利用するばかりではなく、ミヤマイラクサのように数本が株になっている植物は一株からは一本だけ採るといった具合に、「毎年同じ場所で同じ量だけ穫れるように」持続的な資源利用を行うルールがたくさんあった。東北地方の人々は、原生林を伐採してしまうことに対して非常に強い拒否感があるように感じる。全面皆伐してしまえば、大事な山菜やキノコが穫れなくなるからだ。でも、西日本の人々は、照葉樹林に対してそれほど親近感がない。自分で日常的に使う森ではないし、そもそもあまり森に入ることがない。だから人々が照葉樹林に強い共感を持たず、開発にもむしろ積極的だったのではないだろうか。

キノコに関しては、照葉樹林帯でさらに聞き込みを続けていて、加計呂麻島でもシイタケ、アラゲキクラゲ、マツタケ、イグチの仲間、沖縄島でもそれ以上の食茸を聞き出すことはできなかった。照葉樹林文化の本場である雲南のキノコはどうだろうかというのが、長年の疑問であった。なぜなら雲南料理として有名なのは野生菌で、昆明にはキノコ鍋を名物とする店が軒を連ねていると聞くからだ。2010年8月1日から7日までの短期間であったが、



写真3 中国雲南省では、道端でたくさんのキノコが売られていた

雲南でのキノコ食調査を行う機会を得た。キノコ食の季節としてはベストに近かった(写真3)。

「雲南十大美味野生菌」なるものがある。鶏樅(*Termitomyces albuminosa*) オオシロアリタケ：

シロアリが培養する)、竹蓐 (*Dictyophora indusiata* キヌガサタケ: 竹林に発生する)、松茸 (*Tricholoma matsutake* マツタケ: 京都菌類研究所の山中勝次氏によれば、雲南やブータンのマツタケは DNA で調べると日本のものと同一種だが、常緑のコナラ属、マテバシイ属、シイ属などと菌根共生している)、干巴菌 (*Thelephora ganbajun* イボタケ属の一種: マツ林に発生する)、牛肝菌 (*Boletus* spp. イグチ属の複数種: この仲間は大部分が食用。マツヤカシの森林に発生する外生菌根菌で、ヨーロッパではポルチーニやセップとって好まれる)、青頭菌 (*Russula textilis* ベニタケ属の一種: 樹林内に発生する外生菌根菌で薄緑色の傘が大きな特徴)、虎掌菌 (*Sarcodon imbricatus* シシタケ: 乾燥させると強い香りを放つ)、羊肝菌 (*Morchella esculenta* アミガサタケ: 日本ではあまり食用とされないが、フランスではモリーユとって有名食茸)、猴頭菌 (*Hericium erinaceus* ヤマブシタケ: 立枯木に生える白色腐朽菌)、老人頭 (*Catathelasma ventricosum* モミタケ属の一種: 針葉樹に外生菌根をつくる) である。こうしてみると、食味もさることながら、形態的あるいは生態的に特徴があって見誤ることがないキノコを選んでいるのではないかと思いたくなる。ベニタケ属 (*Russula* spp.) の見分けにくい種や、一部はたいへん美味だが、猛毒の種を含むテングタケ属 (*Amanita* spp.) などは含まれていない。滞在期間にかなり気をつけてみた食用キノコも、大部分は十大美味野生菌の仲間か、栽培のキノコであった。雲南での調査も、キノコ誤食回避説を支持していると考えている。

#### 4. 照葉樹林の恵みを活かす

世界的にみれば先進国と中進国・開発途上国の大きな賃金格差と安価な化石エネルギーとの価格競争のなかで、かつての地域資源を利用してきた生活と文化は急速に失われようとしている。果たして、それに歯止めをかける方法はあるのだろうか。個々の地域に埋没しているかぎり、「世の中の流れなのでやむを得ない」という諦念に至るしかない。しかし、これが世界同時多発的な課題であり、多くの地域ではさまざまな対抗策が検討され、実施されているという理解が広まればどうだろうか。

2011年5月に宮崎県綾町で第1回、2014年6月に鹿児島県屋久島町で

第2回と開催した「国際照葉樹林サミット」では、日本各地だけではなく、中国、台湾、韓国、ブータン、ドイツなどから講演者を招聘し、①照葉樹林の文化の特性とは何か、②照葉樹林の風土に根差すとは何か、③伝統技術でなくても照葉樹林帯から新しい工芸や芸術が生まれるのではないかと、④照葉樹林の生態系から自然の恵みをもっと活かす工夫はないのだろうかを議論した。そこではユネスコエコパークの活用という話題が、中心のひとつであった。

ユネスコエコパークは、1971年に発足した「人間と生物圏（MAB）」計画という、人類と環境との間に生じる衝突や問題の解決を目的とした研究および能力強化のための国際プログラムに基づくもので、「世界遺産条約」（1972年採択）よりも歴史が古いものだ。エコパークでは人類と環境との間に生じる衝突や問題の解決のために、対象となる地域を三つに区分けする。生物多様性が豊かな生態系で手を付けずに残しておく核心地域、核心地域を教育・研修・レジャーに活用する緩衝地域、そして核心地域の価値をもとに経済活動を推進する移行地域の三つである。

この三重構造があることが重要である。自然を保全するには、さまざまなコストがかかる。守るべきものを守るだけでなく、守るべきものの現状を研究・調査するにもコストがかかるので、費用を誰が負担するのかが大きな問題だ。その負担を地域社会が担う場合、地域社会はその優れた自然から何を代償として得るのだろうか。もちろん、エコツアーで直接利用するのはわかりやすいが、利益の波及効果には限界がある。地域社会が公平に得られる価値のなかでは、「ブランド化」が一番大事かもしれない。例えば、屋久島は世界自然遺産として、すでに確立したブランドになっていて、水や農産物などが「屋久島の～」という付加価値がついている。エコパークでも緩衝地域を直接利用するのは必要ではあるが、地域社会の経済活動そのものをエコパークの名前でブランド化して付加価値をつけていくのが移行地域の大きな役割であろう。

核心地域と緩衝地域は、自然の条件、つまり生態系の現状や山系、流域、集水域などで範囲が決まってくる。でも移行地域は違う。核心地域の価値を守る責任を負う代償として、ブランド化してその経済的な恩恵を享受する人為的な空間である。宮崎県の綾エコパークでは、これまで有機栽培や照葉樹

林再生など地道な努力を続けてきた綾町という行政単位全体が移行地域として「綾」ブランドによる経済的な恩恵を享受すべきであるし、現実的にそうなっている。

綾の直売所「ほんものセンター」は、年間3億円前後の売り上げがあるという。綾町は30年にわたって有機農業を進めており、独自の認証基準もっている。「ほんものセンター」では綾で生産された農作物、春はタケノコや山菜、冬はさまざまな柑橘類など、四季折々の自然の恵みを販売している。綾の農産物のうち、規格品を多量に生産できるところは大きな市場に流し、少数で多品目のもの、規格外のものは「ほんものセンター」で売っている。ニホンミツバチの蜂蜜や山野草など、これまで未開拓あるいは価値が過少評価されていた照葉樹林帯の資源をうまく利用することによって、小さな産業（スモールビジネス）を興すことができるのだ。綾町にはすでに、地元の食材で作る料理が人気の弁当屋や、安心安全で健康によい薬膳料理を出す民宿などがある。山で綾のすばらしい自然を楽しみ、里で綾の恵みをいただく体験ができるということが、本来目指すべき移行地域のあり方であろう。

綾町では、多くの芸術家を招いている。「現代の名工」に選ばれたガラス工芸作家の黒木国昭氏はそのひとりである。切子細工で複数の色を重ねられるのは、世界中で彼の工房だけとのこと。その黒木氏に「照葉樹林の町・綾で生まれた作品で、何か地域を感じさせる特別なものはありますか」とお聞きすると、「照葉樹林ではいろいろな種類の木々が季節を通していろいろな色を出します。そういう色の煌めきを見てインスピレーションを得ます。このような多様な煌めきをガラスで表現したいのです」とおっしゃっていた。これはいわゆる伝統的な照葉樹林文化ではないが、照葉樹林からインスピレーションを感じて生まれてきた新しい芸術文化だと捉えていいのではないか。照葉樹林帯の生物文化多様性を活かした新たな産業、ひとつひとつは小さくても多種多様なビジネスが生まれていくことを切望するとともに、そのバックボーンにユネスコエコパークのような考え方を据えることを提案したい。

グローバリズムを背景に失われつつあった地域に根ざした文化を、国際的な仕組みあるいは外部からの評価によって生きのびさせるのは、皮肉なこともかもしれない。しかし、これまでですべての伝統は変化することによって生

きのびてきた。照葉樹林の生活と文化もまた長い歴史の中でお互いに交流しあい、高度な知恵が生産されてきたに違いない。照葉樹林の生物文化多様性を過去のものとして美しく保存するよりも、グローバル化した世界のなかで位置づけて、活かしていくことのほうがはるかに重要だとわたしは考える。いわゆる伝統的な照葉樹林文化を超えた先は必ずしもまだはっきりと見えてはいるわけではないが、新たな人材交流によって生まれつつある「兆し」を大切に育てていきたい。

〔参考文献〕

- 市川健夫（1984）日本のブナ帯文化、朝倉書店。  
小山修三（1984）縄文時代、中央公論社。  
佐々木高明（2007）照葉樹林文化とは何か、中央公論新社。  
上山春平編（1969）照葉樹林文化－日本文化の深層、中央公論社。



**湯本 貴和**（ゆもと・たかかず）

京都大学霊長類研究所教授・所長、京都大学ヒマラヤ研究ユニット長。京都大学理学部卒業、京都大学大学院理学研究科博士課程修了（植物学専攻）、理学博士。専門は生態学。第1回、第2回の国際照葉樹林サミットを企画・実行。2013年より屋久島学ソサエティの設立会長を務める。1959年生まれ。

---